

12年ぶりに本市で開催

全国報徳サミット

●日時 11月5日(土)

9時30分開演

※9時受け付け開始。

報徳サミット



●場所 市民会館大ホール

●入場料 無料(どなたでも参加可)

●内容 報徳学習発表、基調講演など



相馬市大会テーマ

「報徳思想にのっとり共に英知を出し
合うひとづくり・まちづくり」

全国報徳サミット

全国報徳サミットは、江戸時代の農政家・思想家である二宮尊徳にゆかりのある全国の市町村で構成された全国報徳研究市町村協議会が開催するものです。1年に1度、同協議会に加盟している17市町村のいずれかで開催されています。本市では、2010年(平成22年)に開催されて以来、12年ぶりの開催となります。

同サミットでは、尊徳が提唱した報徳思想を一つの指針として共に英知を出し合い、温故知新をテーマとして加盟市町村による研究と連携を進めています。

相馬市大会開催の目的

●東日本大震災からの復興を支えた報徳の訓え

本市は、東日本大震災という未曾有の災害を経験し、市民は非常に苦しい状況におかれました。本市では、報徳の訓えを精神的な支柱とし、地道に一步ずつ自らの身の丈に合わせた「分度」を持ち、震災復興に取り組みました。復興という大きな課題に取り組めたのは、報徳思想によって培われた市民の力によるところが大きかったです。

●ご支援への感謝とこれからのひとづくり・まちづくり

全国報徳サミットゆかりの市町村をはじめ、国内外からの支援は、震災復興の強力な推進力となりました。特に震災孤児等の学業・生活支援義援金には多くの心をお寄せいただきました。本市は、この「推譲」精神に富んだ温かい支援に感謝するとともに、この経験を次世代につないでいかなければならないと考えています。

これまでの経験を生かして、私たちは報徳思想を精神的な支柱とし、互いの絆を深め、来る新しい時代を乗り切る英知を探求し共有していかなければなりません。

二宮尊徳(金次郎)

●生没年 1787年～1856年

●生涯

▽小田原藩(現在の栃木県真岡市など)の農家に生まれ、貧しい幼少期を経て、1810年に生家を立て直す。1821年に小田原藩主の分家の領地で、初めて報徳仕法を実施し、立て直しに成功する。以降、現在の関東地方を中心に藩や領地10カ所で報徳仕法を実施する。

▽中村藩(現在の相馬市など)では、1845年に弟子の富田高慶が代理で指導し、中村藩の立て直しに成功する。

▽農民であった金次郎は、功績を認められ1842年に武士になり、「尊徳」と名乗る。

■全国報徳研究市町村協議会

●加盟 17 市町村

▽北海道＝豊頃町

▽福島県＝相馬市、南相馬市、大熊町、浪江町、飯舘村

▽茨城県＝筑西市、桜川市

▽栃木県＝日光市、真岡市、那須烏山市、茂木町

▽神奈川県＝小田原市、秦野市

▽静岡県＝掛川市、御殿場市

▽三重県＝大台町

◎当日、加盟市町村によるパネルディスカッションを行います。



●全国報徳研究市町村協議会加盟市町村位置図

主な活動

同協議会は、二宮尊徳の提唱した報徳思想を学び、混迷した社会を切り開くとともに自治体の行財政改革をすすめ、地方分権の時代に備えたまちづくり・ひとづくりなどを協議しています。

そのほか、全国報徳サミットの開催や、東日本大震災被災市町村の子どもたちの支援、尊徳の業績を普及するためテレビドラマ化の要望などの活動を行っています。

■報徳の訓え^{おし}に心をはげまし、うまずたゆまず

相馬市民憲章にうたわれる報徳の訓えには、次の4つの基本理念があります。これらは、報徳仕法を象徴する重要な言葉として今回の大会ロゴにも使用されています。

至誠

まっすぐで思いやりのある「まごころ」のことで、報徳の訓えの根幹となる考え方です。何事にも誠実に取り組み、努力を積み重ねることで目標が達成されます。

勤労

熱心に働けば、必要な物を手に入れることができます。働くことで人は向上できるという考え方です。

分度

収入に応じた一定の基準（分度）の範囲内で生活することです。

推譲

お金を家族や子孫、将来の自分のために貯めておくこと（自譲）、他人や社会のために譲ること（他譲）です。



■報徳仕法とは？

二宮尊徳の訓えに基づく農村の立て直しを二宮仕法や報徳仕法といいます。本市では、特に敬意を込めて「御仕法」と呼びました。

天明・天保の度重なる飢饉（ききん）などによって荒れた農地を立て直し、農民たちが希望ある生活を送っていただけることを目的としました。

また、その農村で収穫できる米の生産量を計算し、使うことが出来る生活費を決めて（分度）、それ以外の財産を貯蓄することで村の財政を再建します。そして、1つの農村の立て直しが成功したら、その余剰金を次の村の立て直しに使用していきました（推譲）。

さらに、村民たちの投票で働き者を表彰し、お金や鎌・鍬（くわ）などの農具を与えることで勤労への意欲を高めることも行われました。困窮者の救済、家の修理、新築への助成や堤・用水路の建設・修理も行われています。

これらの事業は推譲により集められたお金（報徳金）により進められ、報徳仕法は日本中の600カ村ほどで実施されました。

※天明の飢饉は1782年～1787年ころ、天保の飢饉は1833年～1836年ころに起こったといわれています。



回村之像＝尊徳が報徳仕法を施すために村々を回っている様子を表しています。

報徳仕法の足跡



■中村藩の「御仕法」とは？

(1) 困窮する中村藩

現在の相馬市の位置にあった中村藩は、天明の飢饉をはじめとした度重なる飢饉で、困窮の中にありました。江戸時代初めの元禄・正徳・享保の時代には約9万人いた人口も、天明の飢饉の後には3万6千人にまで激減しました。

(2) 御仕法との出会い

中村藩士富田高慶は、飢饉で疲弊する藩政の助けとなる方法を模索し江戸で学問をしていた時に、尊徳の報徳仕法に出会います。尊徳に入門し、その訓えを学んだ高慶は、藩政の立て直しに有効だと考え、報徳仕法を藩に紹介し、導入が決まりました。

(3) 藩をあげての御仕法

中村藩が御仕法で一番最初に行ったのは、分度の策定です。分度とは、収入に見合った生活をするので、藩の分度に置き換えると年貢米の収入に見合った藩の運営を行うこととなります。藩の分度の決定とは、藩の長期総合計画書を策定することです。

尊徳は、中村藩から提出を受けた藩の過去180年間の年貢米調査結果を基に、御仕法実施後の向こう60年間の分度を策定しました。10年間を一区切りとし、想定した年貢米収入の範囲内で藩の財政を運営していきました。そして、余分ができたときにのみインフラ整備や借金返済などの予算に回すという計画を立てました。

中村藩では、藩をあげて実施したことから、広い地域で優れた成績を上げることができました。中村藩の領内226カ村中、101カ村で御仕法を実施し、55カ村が立て直しに成功しました。なお、残りの村は、廃藩置県のため途中で打ち切りとなりました。

この御仕法からの学びが、今日の本市の復興にも息づいています。

■相馬市歴史資料収蔵館所蔵 御仕法ゆかりの品々

市歴史資料収蔵館の常設展には、中村藩における御仕法の特集コーナーがあり、当時の様子を身近に感じることができる展示を行っています。

同館は地震災害復旧のため現在休館中ですが、全国報徳サミット相馬市大会の開催に向けて御仕法に親しめるよう、本市の宝物である収蔵品の一部を紙面で紹介します。



●二宮尊徳像

▽制作者=佐藤玄々（朝山）

▽高さ= 26 センチメートル

▽制作年= 1941 年（昭和 16 年）

本市出身の彫刻家 佐藤玄々（1888 年～1963 年）の手による二宮尊徳の石こう像です。木彫を石こうで型どりし、黒く着色しています。

本市が輩出した希代の彫刻家の手によって、実学を重んじた壮年の農政家、尊徳の力強い表情とたたずまいが見事に表現されています。

●二宮尊徳使用の小鉢

▽口径= 14.7 センチメートル

▽高さ= 5.2 センチメートル

尊徳自身は相馬を訪れたことはありませんが、その子、尊行らは明治初年に相馬へ移り住みました。

この小鉢は、尊徳が使用したと伝えられており、市歴史資料収蔵館には、同様の絵付けがされた小皿も所蔵されています。



●「報徳記」の原本

中村藩士の富田高慶（1814 年～1890 年）が著した尊徳の伝記です。1856 年（安政 3 年）10 月の尊徳死後に書き上げ、11 月 2 日に成稿、のちに 8 巻に編成しました。尊徳の高弟であった高慶によって尊徳の思想と業績が詳細に書き記されており、報徳仕法を知る上で非常に重要な資料です。

また、本書が 1880 年（明治 13 年）に明治天皇に献上されたことが、尊徳の業績を世に広める契機となりました。



●問い合わせ先 生涯学習課（☎ 37-2187）